

地方から公共性を問い直す ——ローカルメディアを基点として

尾崎 名津子¹羽 渕 一 代¹亀 谷 学¹新 永 悠 人¹アラステア・バトラー¹ジョシュア・ソロモン²アンソニー・ラウシュ³

はじめに

メディア（特にマスメディア）は「現在」を伝えることを役割として発達してきた。それはあたかも、昨日のニュースを忘れるために今日のニュースが伝えられるかのようなものである。そのように「現在」を中心とした社会になると、社会から「判断力」が失われる。このことをいかに解決していくかが、現在を生きる人間に問われているのではないだろうか。社会的判断力の根拠を担保するような、「生きた記憶の伝承」が保証されない時代が現代であるとも言え、それをどういう形で補っていけばよいのかということが、今の世界の大きな課題となっているように見える。いわば「メディアは過去を忘れさせる」とでも言うべき事実がある一方で、メディアは「過去を記録する」という側面も有している。これが、上記の課題解決のために有効であると考えられる。

近代以降の日本でさまざまに展開されてきた、出版、報道等に関するメディアは、その圧倒的多数が東京を中心として築かれてきた。そこで青森のような地域は中央に対する「地方」として新たにイメージされ、そのイメージが実体化、あるいは現地に生きる人びとにおいては内面化されてもいる。地域のイメージがアイデンティティ・ポリティクスと密接に結びつく例も多い。

また、出版物だけがメディアではない。ローカルテレビ番組やラジオ番組、また、方言といった「声」（音声）そのものもメディアであり、地域の中で何かを継承し、共有を促し、共同性を担保する役割を果たしてきた。

本プロジェクトでは、こうしたさまざまなローカルメディアを基点として、地域における公共性、共同性、共同体の持続可能性のありようを多角的に検討、考察する。特色となるのは「共時性」を問うと同時に「通時性」を問題化することも可能な点である。人文学、社会科学の諸領域の学知を結集した、ゆるやかな共同研究体制を構築する。

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 弘前大学教育推進機構

³ 弘前大学教育学部

1. 背景と目的

背景と目的は「はじめに」で述べた通りだが、ここでは昨年度(2020年度)の成果を振り返っておきたい。

昨年度は、ローカルメディアについて「通時的(歴史的)かつ共時的(今日的)」な検討を加えることを全体の目的としつつ、各メンバーが成果を発信してきた。羽渕一代氏は、同ジャーナルに論文「『地方』の若者の定住意向とその要因に関する検討―「青森 20-30 代住民意識調査」の分析から―」(成田凌氏との共著)を発表した。尾崎は、地域未来創生塾 @ 中央公民館の第 6 回として、2020 年 12 月 23 日に「占領期の『月刊東奥』から見る青森の戦後」と題した講座を行った。また、『地域未来創生センタージャーナル』第 7 号(2021 年 2 月)に論文「敗戦直後の青森県内の言説状況―占領期の『月刊東奥』と石坂洋次郎の役割―」を発表した。

さらに、メンバー全員が集まり議論する機会として、2021 年 1 月 23 日に本プロジェクトの第 1 回研究会を開催した。「地方におけるメディアの受容と公共圏の変容」をテーマとし、太田美奈子氏(新潟大学人文学部)とアンソニー・ラウシュ氏(弘前大学教育学部)からの報告をもとにプロジェクトのメンバー間での議論を行った。

2. 実施内容―個別の課題について

本プロジェクトメンバーのそれぞれが専門性を生かし、公共性やローカリティを鍵語として各課題を展開している。

- ① 占領期の青森のメディア環境と地方文学・地方文化(尾崎名津子)
- ② 地方紙と地域のアイデンティティ(アンソニー・ラウシュ)
- ③ ローカルメディアにおける海外情報(亀谷学)
- ④ 青森に生きる若者のメディア利用と公共性(羽渕一代)
- ⑤ 青森県におけるテレビ・ラジオの受容(太田美奈子)
- ⑥ 地方語による表現とその文学的・政治的な意義(ジョシュア・ソロモン)
- ⑦ 青森県における方言の独自性と公共性(新永悠人)
- ⑧ Tsugaru Narratives Annotation Project(アラスデア・バトラー)

これらのうち、羽渕一代氏の論文「デジタルメディア利用に関するライフヒストリー分析の試み」(土橋臣吾氏(法政大学)・浅野智彦氏(東京学芸大学)・岩田考氏(桃山学院大学)・辻泉氏(中央大学)との共著)、ならびに尾崎「『何も考えちゃいないさ。みてただけさ。』―鈴木清順監督作品『弘高青春物語』の表現―」が、ともに『地域未来創生センタージャーナル』第 8 号(2022 年 2 月)に掲載された。

また、アラスデア・バトラー氏が国立国語研究所共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」との共催で、2022 年 1 月 17 日にシンポジウム「津軽方言の統語・意味解析コーパス『松の木』の構築・公開：現状と課題」を開催した(於人文社会科学部視聴覚ルーム)。

3. 国際公開講座 2021「日本を知り、世界を知る」の開催

市民がアカデミックな講座を気軽に受講できる機会がまだ十分にあるとは言えない青森県下の状況を鑑み、2013 年度より例年 11 月 3 日(文化の日)に地域未来創生センターのプロジェクトの一環として開催してきた国際公開講座だったが、2020 年度は開催直前の 2020 年 10 月後半に青森県内での新型コロナウイルス感染症の感染が拡大し、それまで対面での開催を企図してきたがやむなく中止とせざるを得なかつ

た。本来であれば、昨年度から本プロジェクトがこの事業を引き継ぐ予定であったが、それが叶わなかった。

今年度はようやく、11月3日の開催を迎えることができた。以下にその内容を報告する。国際公開講座2021「日本を知り、世界を知る」は、2021年11月3日に弘前大学創立50周年記念会館2階・岩木ホールでの対面形式と、ZOOMによるリアルタイム配信形式との併用で開催された。今年度のサブテーマは「過去と向き合う人文学—その未来を見通す力—」とし、3名の人文社会科学部教員による好演を行った。当日の対面での参加者は20名、オンライン参加は15名であった。講演者と講演題目は以下の通りである。

〔講演1〕三次元データが紐解く、縄文漆工の技

片岡 太郎（弘前大学人文社会科学部 講師）

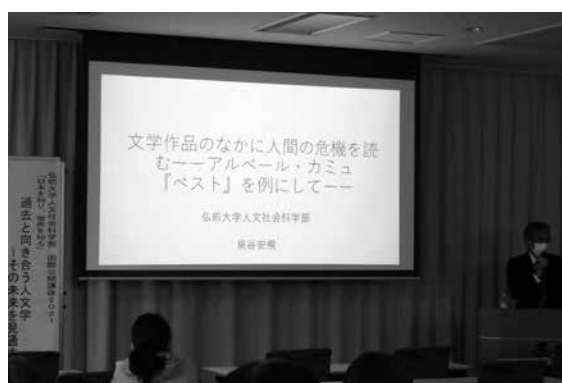
〔講演2〕文学作品のなかに人間の危機を読む

——アルベール・カミュ『ペスト』を例にして——

泉谷 安規（弘前大学人文社会科学部 准教授）

〔講演3〕朱元璋はなぜ南京に行ったのか～明朝建国をめぐる寒冷化・疫病・モンゴル～

荷見 守義（弘前大学人文社会科学部 教授）



なお、オンライン参加者には事前に、対面での参加者には当日、資料集を配付することで、本学部教員たちの研究成果を広くお伝えすることができた。また、若干名ではあっても、いわゆるコロナ前のように来場者と講演者とが講演後に言葉を交わし、交流する様子が見られたことは大きな喜びであった。本講座は10代（高校生）とシニア層からのニーズが例年高く、とりわけ後者の要望から対面での開催が望まれる事業であることがあらためて確認された。来年度以降も継続していくことが、地域の人文学の基盤たる本学部の存在を広く知っていただくことになることは間違いなく、そのための努力が今度も必要であると思われる。

4. 研究会「地方におけるメディアの受容と公共圏の変容」の開催

2022年2月27日（日）に本プロジェクトの第2回研究会を開催した。2021年度に続き「地方におけるメディアの受容と公共圏の変容」をテーマとし、社会科学領域と人文科学領域の二領域からそれぞれ研究成果を共有し、テーマに繋げる議論を全体で行った。報告者は社会科学領域では太田美奈子氏（新潟大学人文学部）、人文科学領域では新永悠人氏（弘前大学人文社会科学部）と近藤亮一氏（弘前大学教育学部）だった。

太田氏は日本における地方のテレビ受容を研究する社会学者であり、青森県を主なフィールドとしている。研究会では、テレビ受容研究が都市部を中心に展開されてきた文脈を踏まえ、青森県内のテレビ受容を各種文字資料、映像資料（写真）から実証的に分析することで、テレビというテクノロジーが公共性に関与する様相を繙いた。

新永氏は本年度より青森手話と津軽方言の収集と調査に取り組んでおり、研究会ではその経過報告があった。近藤氏には本プロジェクトの趣旨にご賛同いただき、英語の方言に関する言語学的分析に基づく研究成果をご報告いただいた。新永氏、近藤氏ともに方言を研究対象とした報告であり、ローカリティを担保する重要なメディアとしての言語の重要性を再確認する機会となった。

いずれの報告もこれまでの研究成果や知見を前提とした大変充実した内容であり、その後の議論においても今後の共同研究における指標となるような観点が様々に提出された。

5. お わ り に

今般の社会情勢下でも可能な形において、文献調査とフィールドワークの両面での調査を展開し、今後も年次研究会等の開催を通して継続的に共同研究を進めていく。また、本プロジェクトメンバーの国際性を活かしつつ、国際公開講座の開催等地域への情報提供、研究成果の公開も行っていきたい。

文化の日は、弘前大学に行こう！

弘前大学人文社会科学部 国際公開講座 2021

「日本を知り、世界を知る」

過去と向き合う人文学 —その未来を見通す力—



2021年(水・祝)

11月3日

13:00~16:10(開場12:30)

弘前大学創立50周年記念会館2階 岩木ホール

文化の日に、津軽や日本、そして世界の文化や歴史を、楽しく学んでみませんか？人文学研究の最先端を、わかりやすくお伝えします。関心のある方はどなたでも、お気軽にご来場ください。

プログラム

総合司会 弘前大学人文社会科学部 准教授 尾崎 名津子

13:00~13:10

開会の辞

弘前大学人文社会科学部長 飯島 裕胤

13:10~14:00

講演1 三次元データが紐解く、縄文漆工の技

弘前大学人文社会科学部 講師 片岡 太郎

14:10~15:00

講演2 文学作品のなかに人間の危機を読む
—アルペール・カミュ『ペスト』を例にして

弘前大学人文社会科学部 准教授 泉谷 安規

15:10~16:00

講演3 朱元璋はなぜ南京に行ったのか
—明朝建国をめぐる寒冷化・疫病・モンゴル—

弘前大学人文社会科学部 教授 荷見 守義

16:00~16:10

閉会の辞

弘前大学人文社会科学部 地域未来創生センター長
李 永俊

参加方法【申込期限:10月22日(金)まで】

①直接来場(定員30名、先着順)

②Zoomアプリを使用したWeb参加

※①、②とも「問い合わせ先」への事前申し込みが必要です。

※新型コロナウイルス感染症の感染状況次第で、全面オンラインでの開催に変更となる場合がございます。

問い合わせ先

弘前大学人文社会科学部

地域未来創生センター(古川・尾崎)

〒036-8560 弘前市文京町1番地

0172-39-3198(直)平日9:15~17:00

irrc@hirosaki-u.ac.jp

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご参加の際は必ずマスクの着用をお願いします。また、入室される際には、手指の消毒にご協力ください。なお、当日体調の優れない方は、ご無理をされないようにお願いします。

※当日会場にマスクのご用意がございません。各自、ご準備をお願いします。

※オンラインにて参加を希望される方は、各自Zoomアプリ(無料)をダウンロードしてください。参加者の皆様はカメラオフで参加可能です。

主催

弘前大学人文社会科学部

弘前大学人文社会科学部 地域未来創生センター

後援

弘前市 東奥日報社 陸奥新報社



弘前大学

地域未来創生センター
Innovative Regional Research Center

Ⅱ.1

地方から公共性を問い直す——ローカルメディアを基点として

講師紹介



講演1

三次元データが紐解く、縄文漆工の技

弘前大学 人文社会科学部 講師

かたおか たろう
片岡 太郎

1979年、長野県生まれ。博士(生物資源科学)。専門は、文化財科学、保存科学。特に、遺跡から発見される有機質遺物の保存科学。近年の業績に、「国史跡山王団遺跡の研究I 漆器編」(弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター、2020)、「福島県荒屋敷遺跡の漆工芸」(弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター、2019)、「X線CT観察による北東北の縄文時代晩期の漆櫛の製作技術」(『考古学と自然科学』、日本文化財科学会、2017年)がある。



講演2

文学作品のなかに人間の危機を読む ——アルペール・カミュ『ペスト』を例にして

弘前大学 人文社会科学部 准教授

いずみや やすのり
泉谷 安規

1965年、青森県生まれ。専門は19世紀と20世紀のフランス文学・思想。近年の業績に、「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(Ⅰ～Ⅲ)」(Ⅰ=『人文社会論叢』(人文科学編)第24号、2010年。Ⅱ=『人文社会科学論叢』第5号、2018年。Ⅲ=『人文社会科学論叢』第7号、2019年。)がある。



講演3

朱元璋はなぜ南京に行ったのか ～明朝建国をめぐる寒冷化・疫病・モンゴル～

弘前大学 人文社会科学部 教授

はすみ もりよし
荷見 守義

1966年、茨城県生まれ。博士(史学)。専門は、中国史(特に明代史)・東アジア地域史。近年の業績に、単著として『明代遼東と朝鮮(汲古叢書 113)』(汲古書院、2014年)、『永楽帝—明朝第二の創業者(世界史リブレット人038)』(山川出版社、2016年)があるほか、「巡視と巡関—明代首都北京防衛をめぐる—」(妹尾達彦編著『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会』中央大学出版会、2020年)など論文多数。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご参加の際は必ずマスクの着用をお願いします。また、入室される際には、手指の消毒にご協力ください。なお、当日、体調の優れない方は、ご無理をされないようにお願いします。

※当日会場にマスクのご用意がございません。各自、ご準備をお願いします。

※オンラインにて参加を希望される方は、各自Zoomアプリ(無料)をダウンロードしてください。参加者の皆様はカメラオフで参加可能です。

参加方法

①直接来場(定員30名、先着順)

②Zoomアプリを使用したWeb参加

※①、②とも「問い合わせ先」への事前申し込みが必要です。

申込期限:10月22日(金)まで

問い合わせ先

弘前大学人文社会科学部 地域未来創生センター
(古川・尾崎)

〒036-8560 弘前市文京町1番地

0172-39-3198(直) 平日9:15~17:00

irrc@hirosaki-u.ac.jp



手指の消毒・マスク着用

にご協力をお願いします

